

よしひろ むねゆき こう みんな  
吉弘統幸公ゆかりの民話

よし な がわ ひ わ  
吉名川悲話



ふんか じだい あづち ももやま  
きらびやかな文化の時代、安土・桃山。

ひと じだい お ころ せきがはら たたか ふつか まえ はなし  
その一つの時代の終わり頃、関ヶ原の戦いの二日前のお話です。



やまじょうしゅ よしひろ か え むねゆき くろだじょすい かんべえ たいぐんはっせん  
屋山城主であった吉弘嘉兵衛統幸は、黒田如水(官兵衛)の大軍八千と

べっふいしがきばる たたか むねゆき ぐんにせん しょうり おさ  
別府石垣原で戦いました。しかし、統幸の軍二千では勝利を収めることはできず、



とうとう<sup>むねゆき</sup>統幸は<sup>せんし</sup>戦死しました。

そしてその首は、<sup>くび</sup>石垣原の<sup>いしがきばる</sup>獄門台に<sup>ごくもんだい</sup>

さらされました。





はいせん き ぼ だいじ きんそういん じゅうしょく  
敗戦を聞いた菩提寺、金宗院の住職は、

むねゆき れい くび いしがきばる と もど い  
統幸の霊をとむらうために、その首を石垣原へ取り戻しに行きました。



むねゆき くび かぜ ひか はら なか  
統幸の首は、風に光るかや原の中に  
か は  
変わり果ててさらされていました。



金宗院（松行）

奥畑

鹿鳴越

石垣原

じゅうしょく なみだ くび せ お  
住職が涙ながらにその首を背負い、

か な ごえ おくばた  
鹿鳴越から奥畑をとおり、

おも まつゆき かえ つ  
やっとの思いで松行まで帰り着き、

まえ かわ くび あら とき  
前の川で首を洗おうとした時です。


むねゆき  
統幸は「カツ」と目を開け、

じゅうしょく よしな さけ  
「ああ、住職、よしな(吉名)」と叫んだのです。

じゅうしょく おどろ あら  
住職は驚き、洗うのをやめました。







そして、寺に持ち帰り<sup>てら も かえ</sup>厚く<sup>あつ</sup>供養<sup>くよう</sup>しました。

それからは、いつしかこの川を<sup>かわ</sup>

「吉名川<sup>よしながわ</sup>」と村人<sup>むらびと</sup>は呼ぶ<sup>よ</sup>ようになり  
ました。

おしまい